大門町埋蔵文化財調査報告　第20集

（文化財愛護シンボルマーク）

富山県大門町

二口油免遺跡第Ⅲ次A地区発掘調査概報

――二口土地区画整理事業に係る調査――

1999年３月
大門町教育委員会

巻頭図版

調査対象地遠景（西から）

序

豊かな自然に恵まれた大門町の丘陵地や射水平野には様々な遺跡が存在しています。

二口油免遺跡は射水平野の最西端に位置し、平成５年度に県営ほ場整備事業に伴う試掘調査で確認された遺跡です。

平成８年度には大門町二口土地区画整理事業に伴う試掘調査でさらに範囲が拡大されました。

事業範囲内約12,200m²の広大な面積において保存が不可能と判断されたため、翌９年度より記録保存を目的として本調査を実施しています。

本年度は２年目の調査ですが、弥生時代後期や奈良・平安時代の遺構・遺物が検出され、この地には非常に長い間に渡って人々が生活していたことを示してくれました。

この報告書は、その成果が地域の歴史の理解や文化財の保護意識の高揚に寄与できることを願ってまとめたものであります。

資料としてご活用頂けたら幸いに思います。

最後になりましたが、調査にあたり寛大なご理解と多大なご協力を頂きました大門町二口土地区画整理組合のみなさまに心より感謝申し上げます。

平成11年３月

大門町教育委員会

例　　言

1　本書は、富山県射水郡大門町に所在する二口油免遺跡の発掘調査報告書である。
2　調査は、富山高岡広域都市計画事業　二口土地区画整理事業に伴う本調査である。調査は大門町二口土地区画整理組合と大門町との間に締結した委託契約に基づき、大門町教育委員会が実施した。
3　現地調査は1998年６月１日～12月18日まで行い、整理作業は現地調査開始より1999年３月25日まで行った。調査面積は4,700㎡である。
4　調査は、富山県埋蔵文化財センターの指導・協力を得て大門町教育委員会が実施した。調査担当者は下記のとおりである。

大門町教育委員会	社会教育係	学芸員	尾野寺　克　実
同		調査員	中　井　英　策

5　本書の執筆・編集は、尾野寺・中井が行った。
6　発掘調査作業・遺物整理作業には（社）大門町シルバー人材センターの御協力を得た。
7　調査から本書の作成に至まで、下記の方々から有益な御教示を得た。記して感謝の意を表する。
安念幹倫・池野正男・伊藤隆三・上野章・宇野隆夫・久々忠義・黒坪一樹・高梨清志・田中明・塚田一成
辻谷真夕・真鍋治・宮田進一・山口辰一（五十音順・敬称略）
8　遺物整理、報告書作成作業の参加者は次のとおりである。
高木公輔・高田紀美代・布目美佳・矢村有紀

本文目次

Ⅰ　遺跡の立地……1

Ⅱ　調査に至る経緯……2

Ⅲ　調査の概要……2
　1．調査の方法……2
　2．調査……2
　　a　基本層序……2
　　b　第１・第２トレンチ……4
　　c　第３トレンチ……6

Ⅳ　まとめ……8

挿図目次

第１図　調査対象地位置図……1
第２図　遺構配置図……3
第３図　SD610・SX585……4
第４図　方形区画２・３・４……5
第５図　10T～U区遺構群……6
第６図　SD1001……7

図版目次

図版１　出土遺物実測図（弥生時代１）……9
図版２　出土遺物実測図（弥生時代２）……10
図版３　出土遺物実測図（弥生時代３）……11
図版４　出土遺物実測図（弥生時代４）……12
図版５　出土遺物実測図（奈良・平安時代）……13

写真図版目次

巻頭写真　調査地遠景（西から）
写真図版１　遺構写真……14
写真図版２　作業風景写真……15
写真図版３　遺構写真……16
写真図版４　遺構写真……17
写真図版５　遺物出土状況写真……18
写真図版６　出土遺物写真（１）……19
写真図版７　出土遺物写真（２）……20
写真図版８　出土遺物写真（３）……21

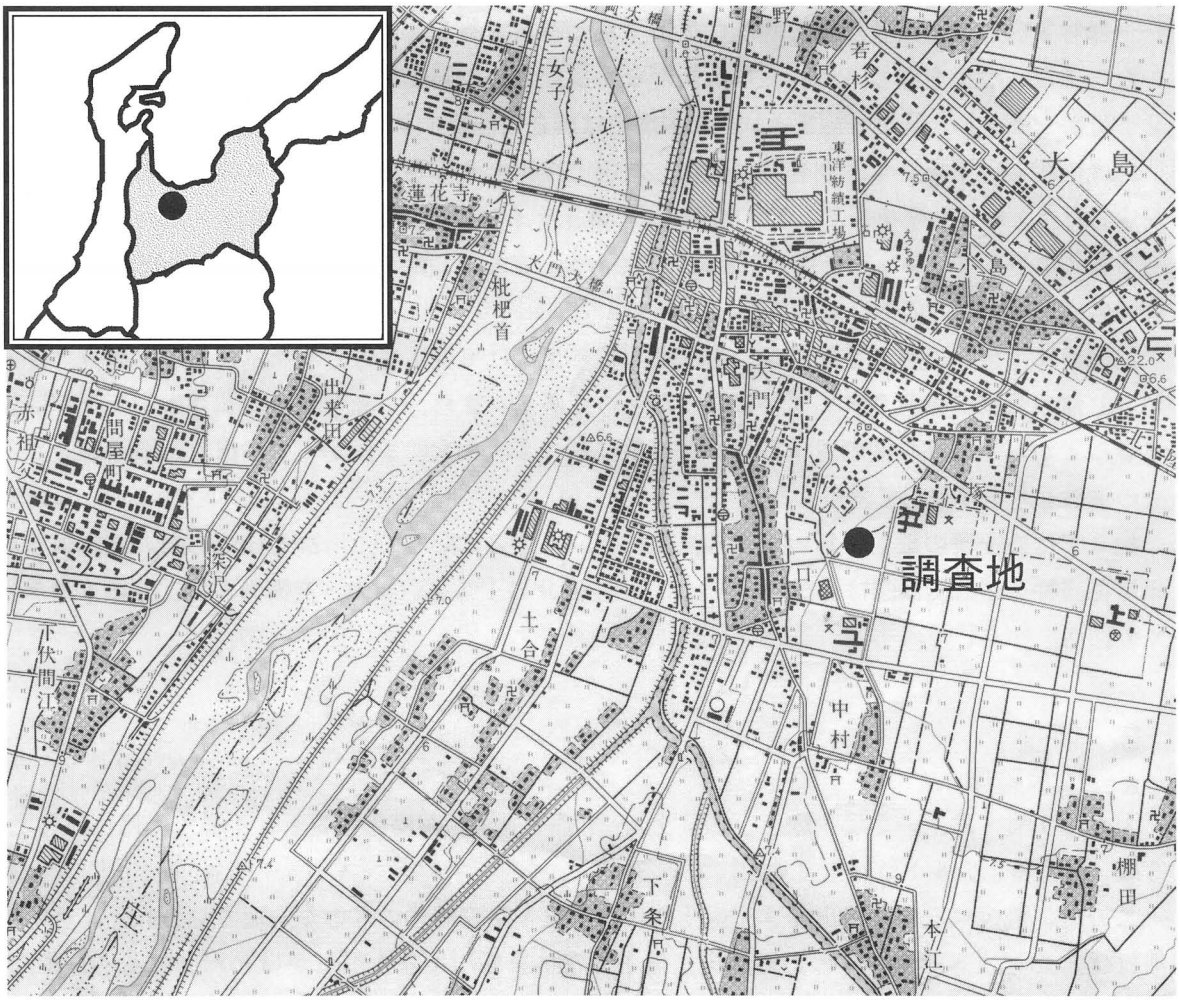
Ⅰ．遺跡の立地

二口油免遺跡は富山県の庄川下流の右岸に拡がる標高７ｍ前後の田園地帯に立地する。現在の行政区画では射水郡大島町との境界に接する。一帯については古くは三島野と呼ばれていた。湿地帯に微高地が点在する風景を表現したものと推察できよう。

転じて、近景では標高が北に向かって緩やかに下がる平らな地形である。これは昭和９年、庄川の大洪水の後に実施された耕地整理により、旧地形が改変されたものである。平成８年度の試掘調査では大門小学校西側及び、大門町立体育館西側の試掘トレンチで、いわゆるピート層を確認しており、以前は低湿地であったことがよくわかる。標高は東に行くにつれ緩やかに上昇し、西には現在の九ヶ用水に流れ落ちる地形である。

二口油免遺跡では標高７ｍ付近を境に遺構の検出状況に差異が生じる。これは旧地形の影響に因るところが大きいと思われる。

すなわち、近世に至るまで周辺の主な生活は標高７ｍ以上と思われ、旧地形がそれよりも低ければ遺構の分布は希薄になり、それ以上であれば近年の耕作・土地改良により削平を受けやすい状態にあるといえる。このことからも遺構の分布による評価は慎重にすすめる必要性があると考えられる。



第１図　調査対象地位置図（S=1／25,000）

Ⅱ．調査に至る経緯

大門町二口地内において土地区画整理事業が実施されることになり、平成７年度の分布調査結果を基に平成８年度には試掘調査を実施した。その結果、大門中学校西側から九ヶ用水までの試掘トレンチにて多数の遺構・遺物が確認された。

そこで、大門町二口土地区画整理組合と大門町教育委員会との間に協議を持ち、合計12,200m²を対象として本調査を実施することとなった。平成９年度は4,000m²について調査を行った。

平成10年度は事業の早期完了を目標に、事業者から残り8,200m²全ての調査を依頼されたが、日程上、大門教育委員会のみで調査を全うすることが不可能と判断されたため、一部について業者発注することとなった。

平成10年度発掘調査面積8,200m²の内、大門町教育委員会は、4,700m²を受け持ってＡ地区とし、残る3,500m²はＢ地区として大門町教育委員会の指導の元、㈱中部日本鉱業研究所が請負い、Ａ・Ｂ両地区同時に調査を実施した。

Ⅲ．調査の概要

１．調査の方法

調査区の現状は圃場であるため、トレンチ設定後重機により耕作土の除去を行った。トレンチは調査順に第１～第３トレンチまで設定した。

一部対象区には区画整理後、圃場に復旧するところもあることから、耕作土の取り扱いを考慮した。また、廃土を置くスペースに余裕がなかったため、第１トレンチ掘削中の廃土は第２トレンチに借り置きし、第２・第３トレンチ掘削中は調査後の第１トレンチに廃土を集めた。

地区の設定は平成９年度調査時に使用した国土座標をそのまま展開し、一辺10mのメッシュを設定した。Ｘ軸に数字をあて、Ｘ＝80.330mを第５ラインとし、北に10m毎に６・７…と続く。

Ｙ軸にはアルファベットを用い、Y=－9.800mをＬとして、西から東にＬ・M…と続ける。また、地区名は東南角杭の名称を地区名とした。

遺構は検出後、遺構の種類に関わらず通し番号をつけて遺構番号とした。従って、調査の進展により他の遺構に吸収されて欠番になったものもある。また、平成９年度の調査トレンチが隣接することから平成９年度の遺構番号から連番にし、２次３次にまたがって検出した遺構は２次調査の遺構番号を優先して使用した。

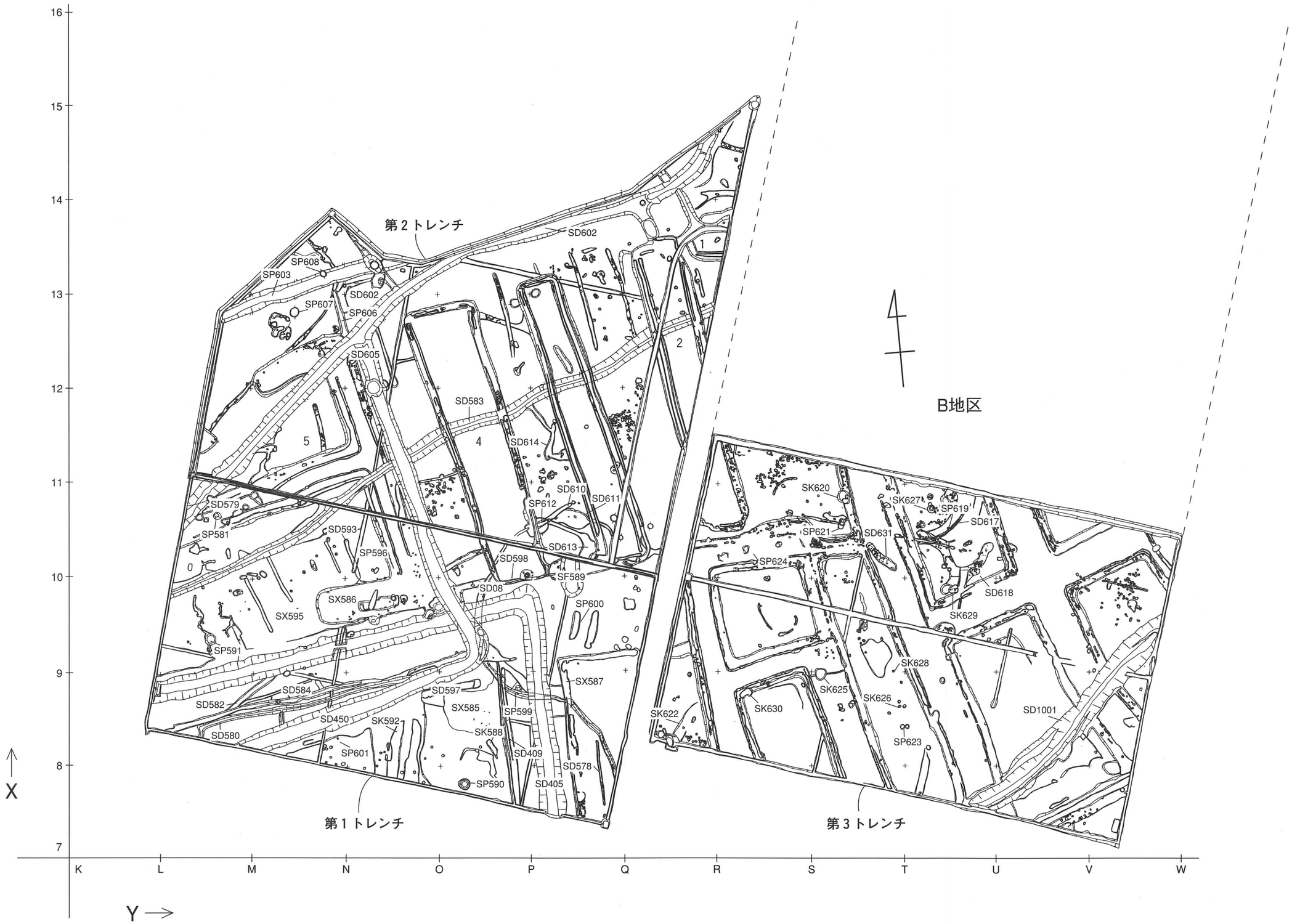
掘り下げは土層の観察を行いながら慎重に行い、必要に応じて土層図を作成した。記録は写真撮影を適時行い、実測図はラジコンヘリにより200分の１スケールの写真撮影から50分の１スケールの図面を作成した。

2．調査

a　基本層序

上から１層・耕土、２層・床土（旧耕土）、３層・（暗）茶褐色粘質土、４層・黒褐色粘質土、５層・暗青灰色シルト質粘土（地山）である。

この内、遺構は５層で検出でき、弥生時代、奈良・平安時代のものが一面で見られた。３・４層はほとんど遺存せず、そのために床土直下で遺構を検出できた箇所がほとんどである。また、地山は北側に移動するにつれシルト系から砂質系に変化する傾向を示す。地山の一部では墳砂の基部のような砂層が縞状に走る場所が認められた。



第2図　遺構配置図（S=1／400）

b　第１・第２トレンチ

平成９年度第２トレンチの北側に続く地区である。

地形的には東から西に向けて序々に下がる。遺構の検出はトレンチ東側で顕著である。

以下に主な遺構を紹介する。

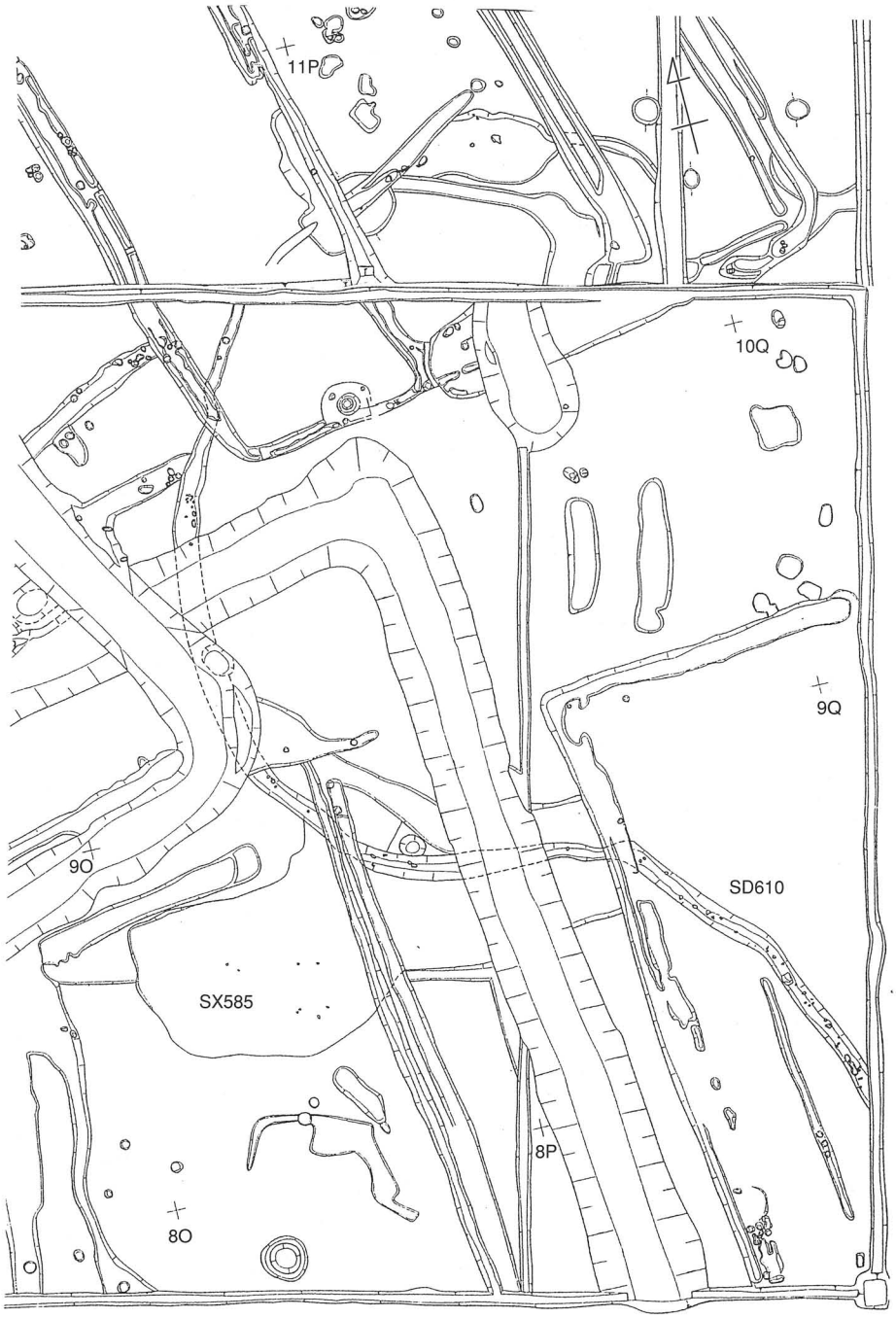
弥生時代

SD610

２次調査の第１トレンチでＳＤ08として検出しているものと同一遺構である。幅約50㎝を測り、Ｓ字状に大きく蛇行しながら第２トレンチ東南角で浅くなりつつ消滅する。消滅した付近には弥生期の遺構が重なり合っている。この溝はＳＤ1001に合流し、排水路の役目を果たしていたと思われる。埋土には黒褐色土が入る。

SX585

平面は南に円弧を描く直径約７ｍの半円形である。深さは最大15㎝で、くぼむ皿状の凹地である。埋土には黒褐色土が入り、弥生土器細片を多く包含していた。形状から住居の残欠が考えられるが、柱穴・側溝等が検出できなかったので可能性の指摘に止める。



第３図　SD610・SX585（S=1／200）

中世～近世

SD450（SD605）・SD602・SD603

これらの溝状遺構は検出した遺構の中でも特に新しいものの一つである。

ＳＤ450（ＳＤ605）は幅約２ｍを測り、暗褐色粘質土が堆積する。検出の状況から第１トレンチで確認したＳＤ450と第２トレンチで確認したＳＤ605は同一のものと判断できた。第１トレンチ南辺から東西に約25ｍは15°方位をずらしてのび、直角に北側へ向きを変える。第２トレンチで方形区画５の東辺に重なりながら北端をＳＤ602に合流する。

ＳＤ602は調査区の北辺に沿って検出した。現在の大島町との町境をトレースするようにはしる。方形区画５を切って、方形区画２と合流する。排水路を兼ねた地境溝の可能性が高い。

ＳＤ603については、ＳＤ602に付随する施設と思われる。

方形区画1・2・3・4・5

方形区画は２次調査時に中世遺構の上にさらに方形の暗褐色砂質土の堆積を検出していたものである。２次調査では一部のみの検出であったが、今次調査では全体を確認することができた。

第４図　方形区画2・3・4（S=1／300）

遺構は区画２・３・４が南北約32m・東西約６～７mの長方形で辺に沿って内側の四周に溝を巡らす。内部は検出面よりやや低く削られており、検出時は平板な暗茶褐色の方形に見えるが、完掘すると長方形に巡る溝に見える。ＳＤ602との切りあい関係から区画１・５と２・３・４は時期差があり、区画１・５が先行する。平面形も１・５は不定形である。各区画は溝によって連結されている。また、区画内部にも溝がわずかに残る箇所もある。この区画は水はけをよくするため四周の溝を深くし、内部は畝を形成するような耕作を行っているものと考えられることから、畠の可能性が強い。区画と区画の間が離れるのは同種を密集させないという病害に対する配慮から、根の浅い他種の作物をこの間で栽培していたと思われる。

弥生～古代

SD583

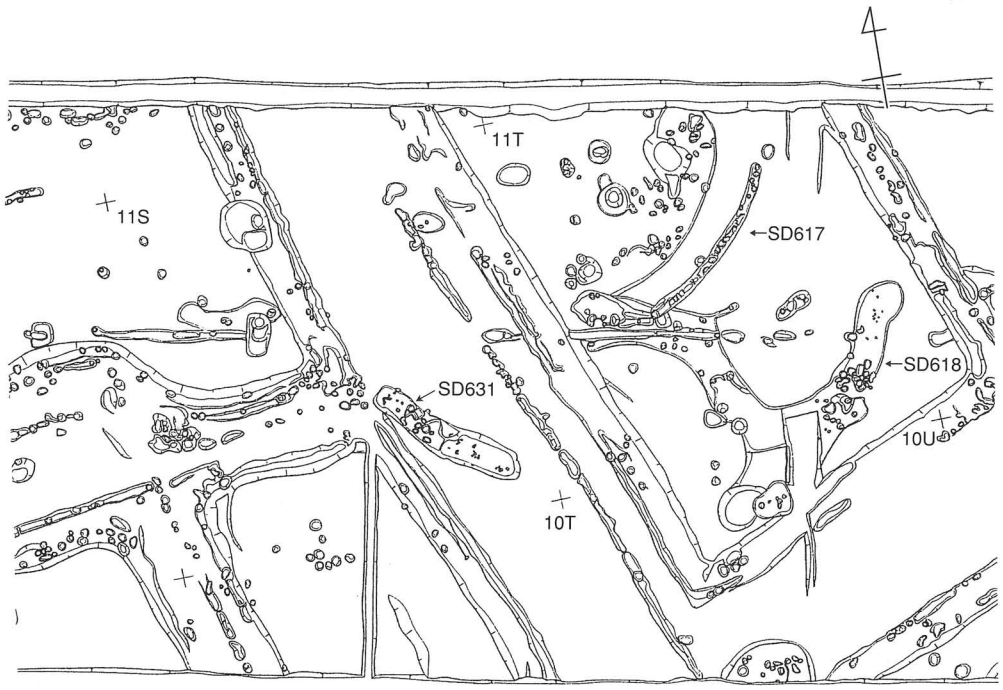
第１～２トレンチを北東方向に一直線にのびて、Ｂ地区に入ってからは北へ流れを変える溝である。幅約1.8m、深さ約70cmを測り、検出した長さは約65mである。断面形状は上部がすり鉢形で底面はやや方形になるため、矢板状のものが使用されていた可能性がある。覆土は大きく２種に分かれ、方形を呈する底面近くは黒褐色土で、すり鉢状を呈する上部は茶褐色土が入る。底部の黒褐色土からは弥生土器が、上部の茶褐色土からは須恵器が出土している。ＳＤ1001と同じく、弥生期の溝が奈良・平安時代に再利用されたものであると考えられる。

c　第３トレンチ

トレンチ東部を流れるＳＤ1001の上面を茶褐色粘質土が覆い、その周辺にも広がる。ここでも区画遺構が５基確認できた。また北部中央では弥生期の土坑が検出でき、一括資料を得ることができた。

10Ｔ～Ｕ区遺構群（弥生時代）

10Ｔ・10Ｕ区にまたがり、浅い遺構が集中する。特にＳＤ618はトレンチの端でもあり、



第５図　10T～U区遺構群（S=1／200）

一部しか図上に表れていないが、その北側のＢ地区で残りの部分が検出されており、直径25m前後の楕円形を呈する区画遺構であることが分かっている。この遺構の内部に柱穴と考えられる浅い穴が多く見られ、平地式住居の残穴と考えられるものも含まれる。周堤基部がわずかながら検出でき、その幅は約３～3.5mを測る。

SD617

推定周提帯内側に位置し、弧を描く。Ｂ地区でこの遺構の延長と思われる溝が検出されており、直径25mの区画を為すと考えられる。幅約30㎝、深さは約15㎝を測る。

SD618・SD631

２条の溝として検出したが、実際はＢ地区で確認した区画溝の一部で、削平のため深い部分だけが残ったものと考えられる。Ｂ地区では、半円形を描いて検出し、本調査区境につながる。長径25m、短径７mを測る。Ａ地区では中央に向けた分岐が見られる。幅約１m、深度は20㎝前後を測る。遺物は弥生時代後期のものが多量に出土している。

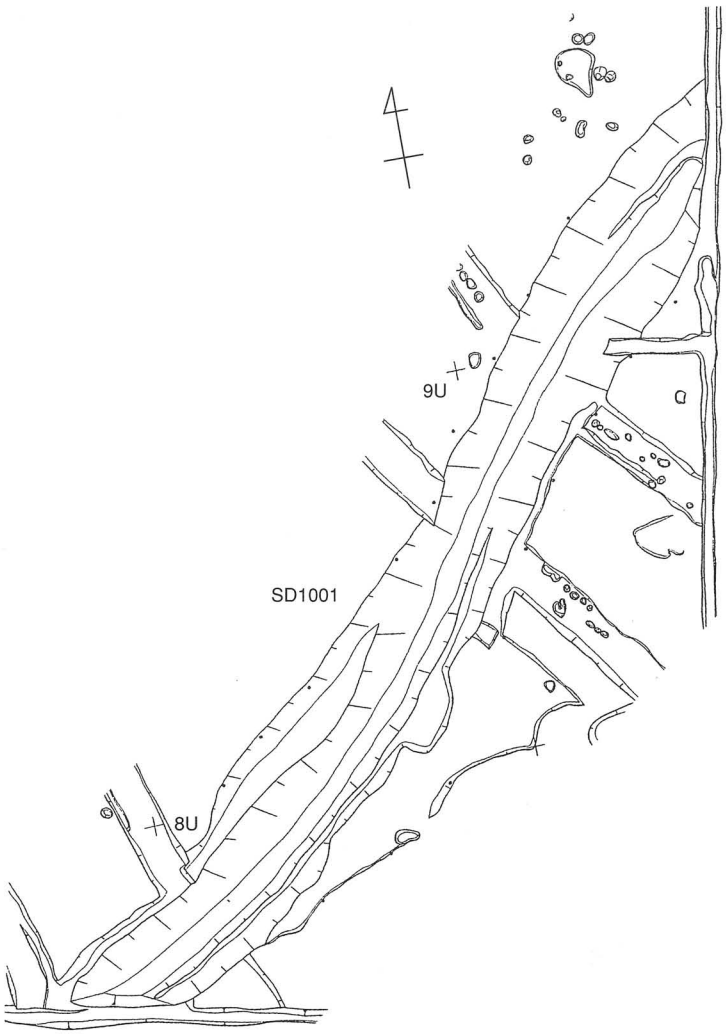
弥生～古代

SD1001

第２次調査では、第１トレンチ南西角から第３トレンチ北側壁まで約50mにわたり緩やかに逆Ｓ字を描いている。今次調査では第３トレンチ南壁東側から、東壁中央部に向かって一直線に延びる、約20mを検出した。断面は深いＶ字型であるが、肩部がやや崩れ広がっている。幅約２～2.5m、深さ約1.5mを測る。

土層は弥生時代の層と古代以降の層に大別できる。弥生時代の掘割が埋まりかけた後、奈良時代にその上をなぞって新たに掘り込まれている。弥生時代の層も出土遺物からさらに大きく２期に分けられ、かなりの長期間使用されたものと考えられる。

遺物の出土量は前回調査を大幅に下回るが、前回と同じく下層に弥生土器、上層には、須恵器・土師質土器がまとまって出土した。



第６図　SD1001（S=1／200）

Ⅳ．まとめ

・弥生時代から古墳時代にかけては、集落としての密度・拡がり・景観の時期的変遷をより明らかにする。

・古代～中・近世について２次調査で検出された掘立柱建物群の規模・時期を絞り込む。

以上のことが３次調査の課題であった。結果としては近世のものと考えられる耕作が地山に達していたため、遺構の遺存状況が悪く、遺構の拡がりを確認するに止まった。

しかし、弥生時代の成果としては、集落の境界と思われたＳＤ1001の北西に平行するＳＤ583が検出でき、住居の痕跡と考えられる遺構も数基、確認できた。

ＳＤ583以西にはほとんど遺構が見られず、ここで集落の境界になる可能性が強い。

ＳＤ1001とＳＤ583を環濠として捉えるか否かは、資料不足のため踏み込んで考えることは避けるが、この集落における両溝の意味合いが重要になるものと考えられ、非常に興味深い。

本調査区の奈良・平安時代については、ＳＤ1001以北は遺構の分布が閑散としており、集落の拡がりの終りを感じさせる。しかし、Ｂ地区北部では掘立柱建物が２棟検出され、また、ＳＤ583の延長がその建物遺構周辺まで延びると、他の数条の溝と共に多量の古代遺物を含むことになる。２次調査では６棟の掘立柱建物が検出されており、２次調査区の南東に集落の中心の存在が考えられ、今回検出したものは、その北端部になると考えられる。

近年、氷見市で新たに全長107ｍの巨大前方後方墳の柳田布尾山古墳が確認された。また、婦中町の県指定史跡勅使塚古墳は３世紀末の築造であると報告されている。弥生時代から古墳時代の社会変革が見直されている中で、この地における弥生時代終末の軍事的性格を帯びた集落の有無は、上記の古墳を支えた社会の成立を解明する上で特に要になると思われる。

参考文献

㈱中部日本鉱業研究所・大門町教育委員会　1999　『二口油免遺跡Ｂ地区発掘調査報告』

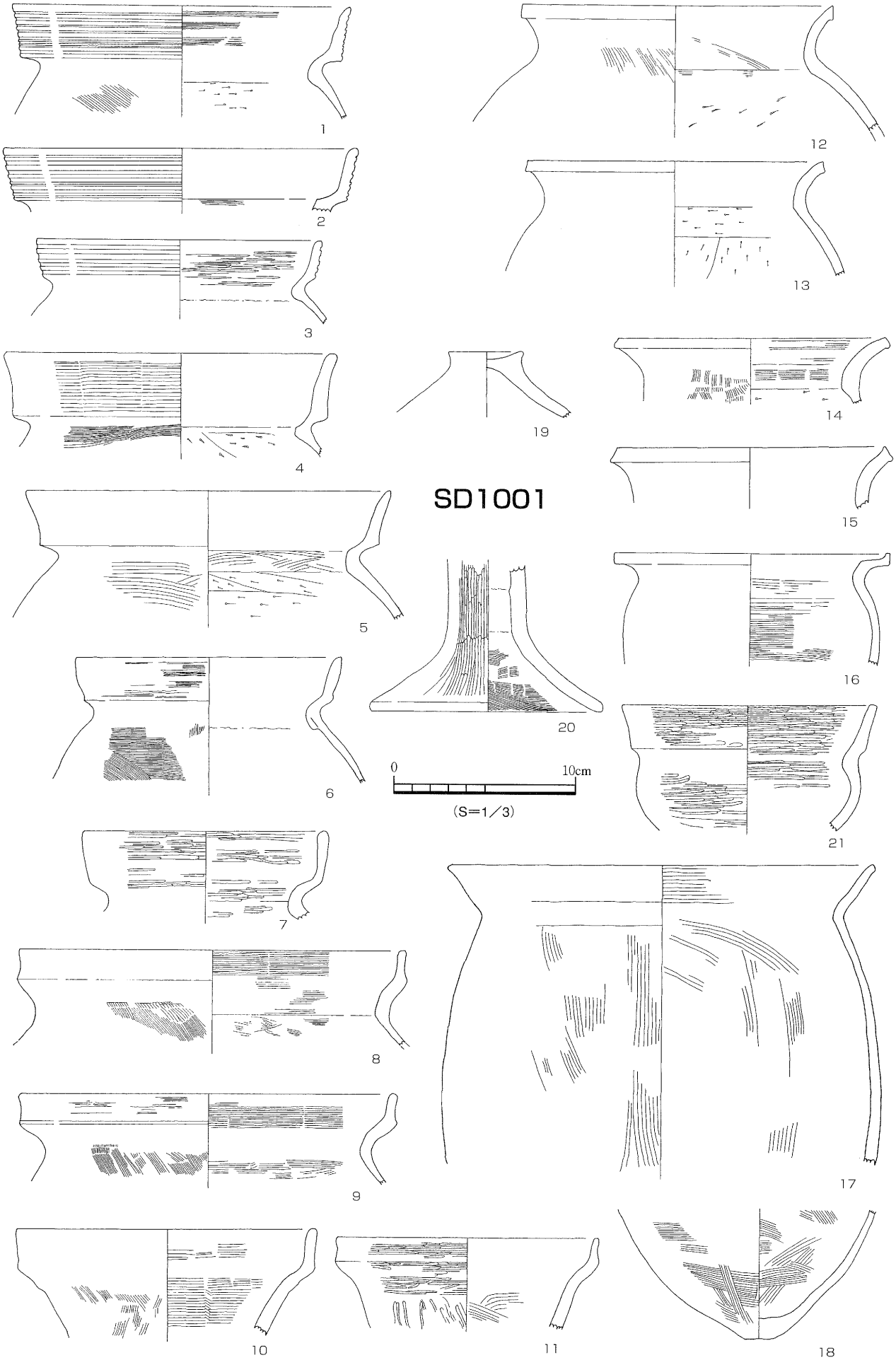
田嶋明人　1986　「漆町遺跡出土土器の編年的考察」　『漆町遺跡Ｉ』石川県立埋蔵文化財センター

田嶋明人　他　1987　『永町ガマノマガリ遺跡』　石川県立埋蔵文化財センター

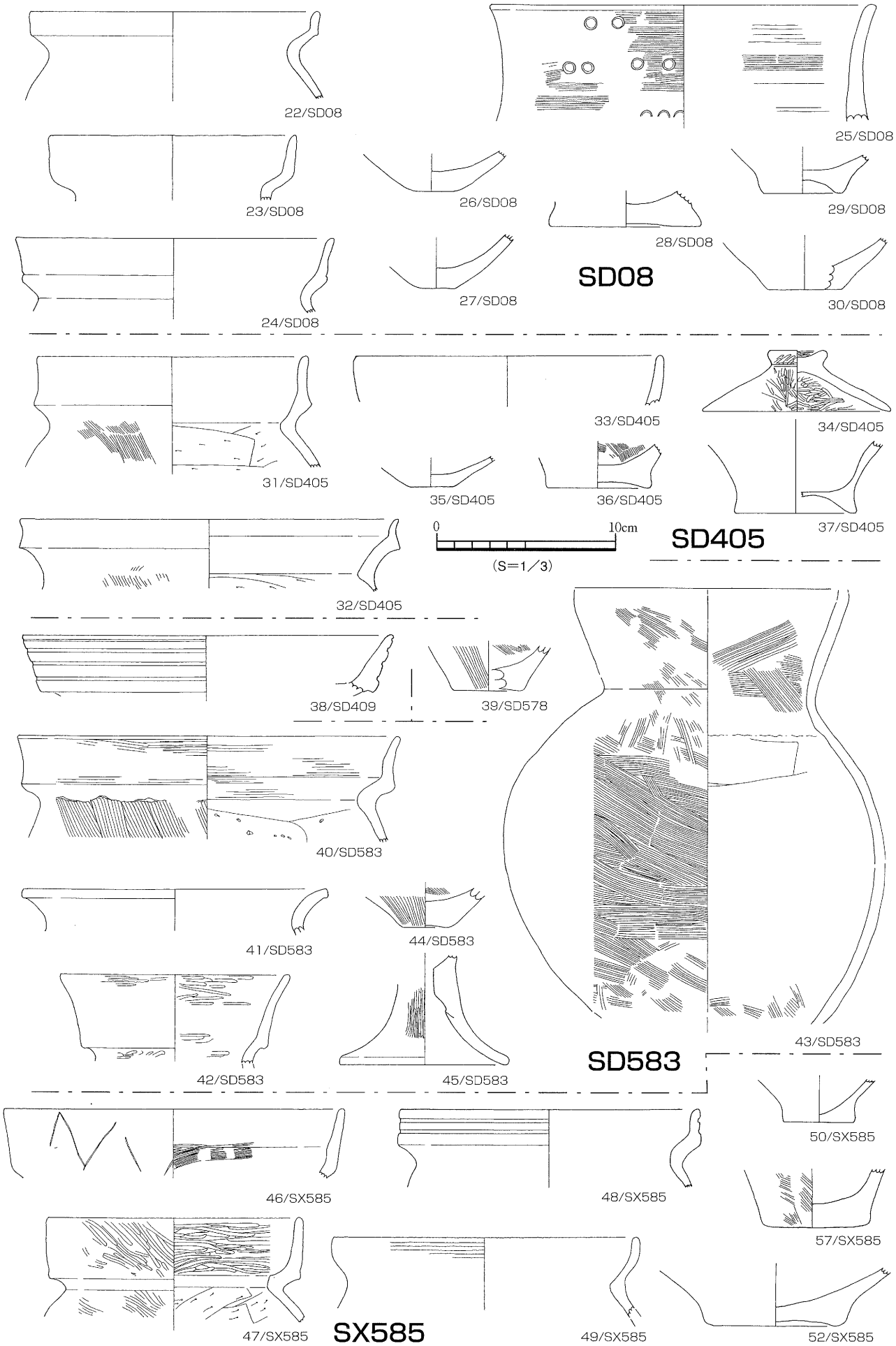
富山県文化振興財団　1998　『勅使塚古墳発掘調査現地説明会資料』

栃木英道　1984　「器台形土器の形態の変遷について」　『北陸の考古学』第５編　石川考古学研究会

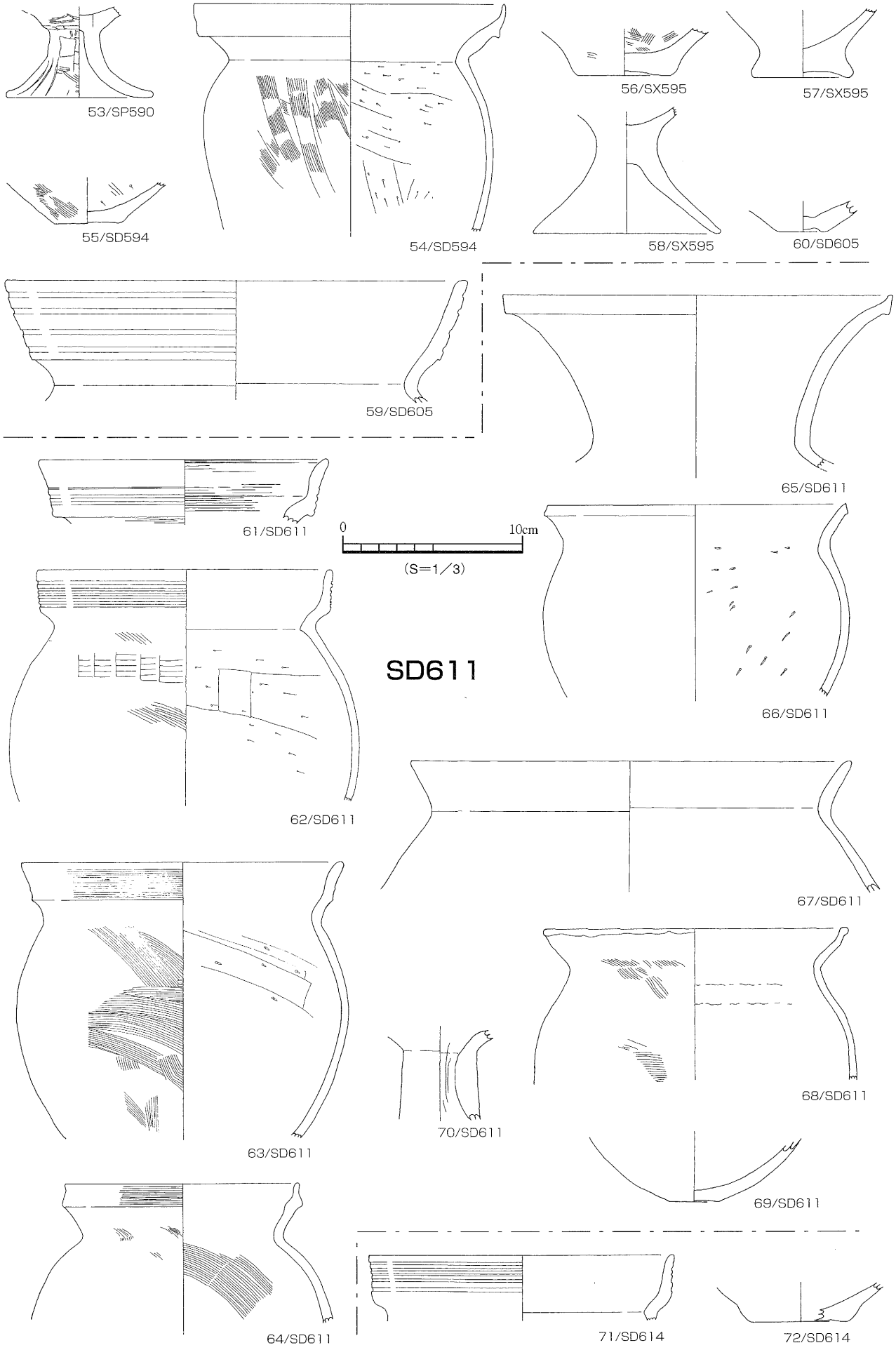
谷内尾晋司　1984　「北加賀における古墳出現期の土器について」
『北陸の考古学』第５編　石川考古学研究会



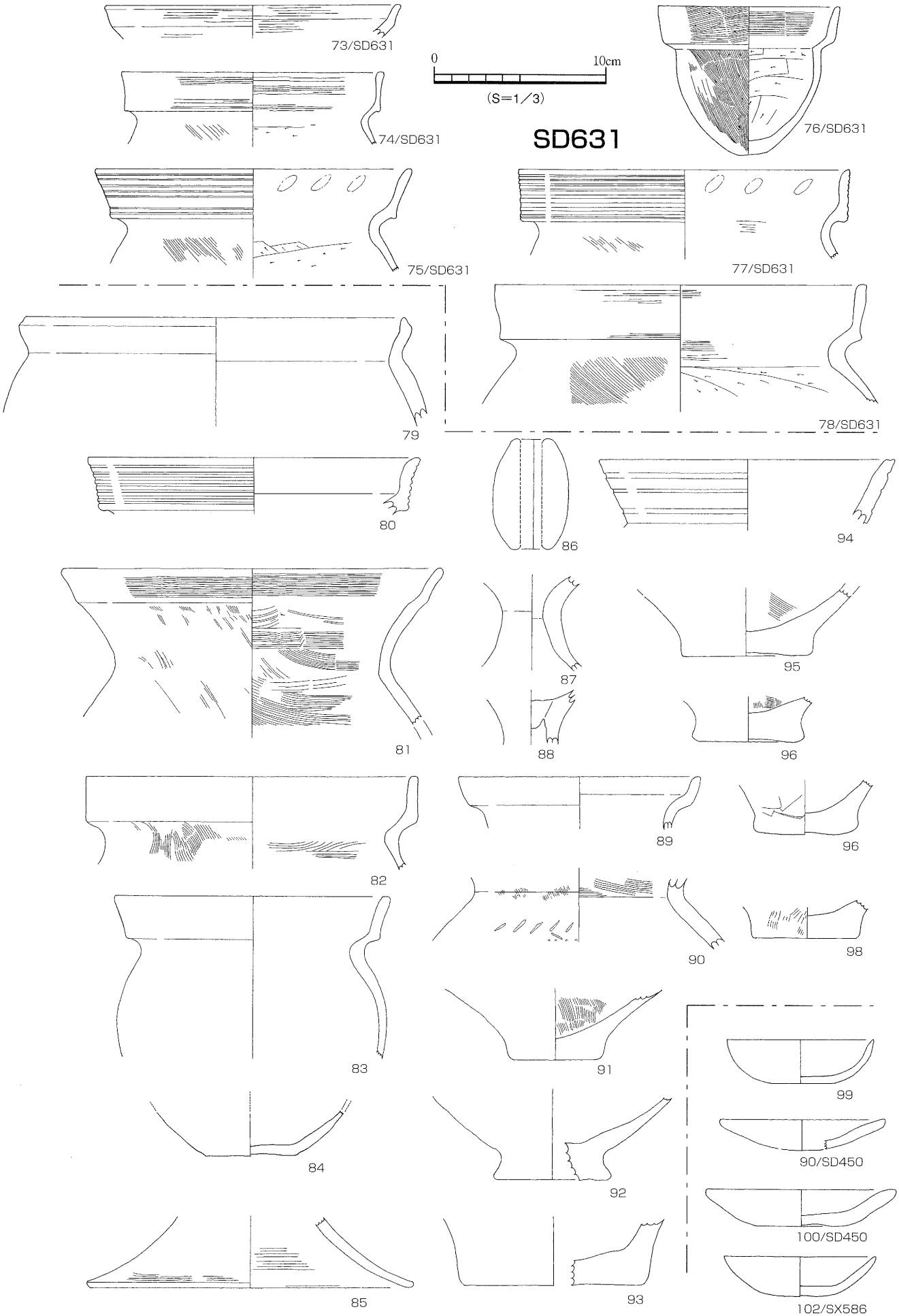
図版１　出土遺物実測図（弥生時代１）



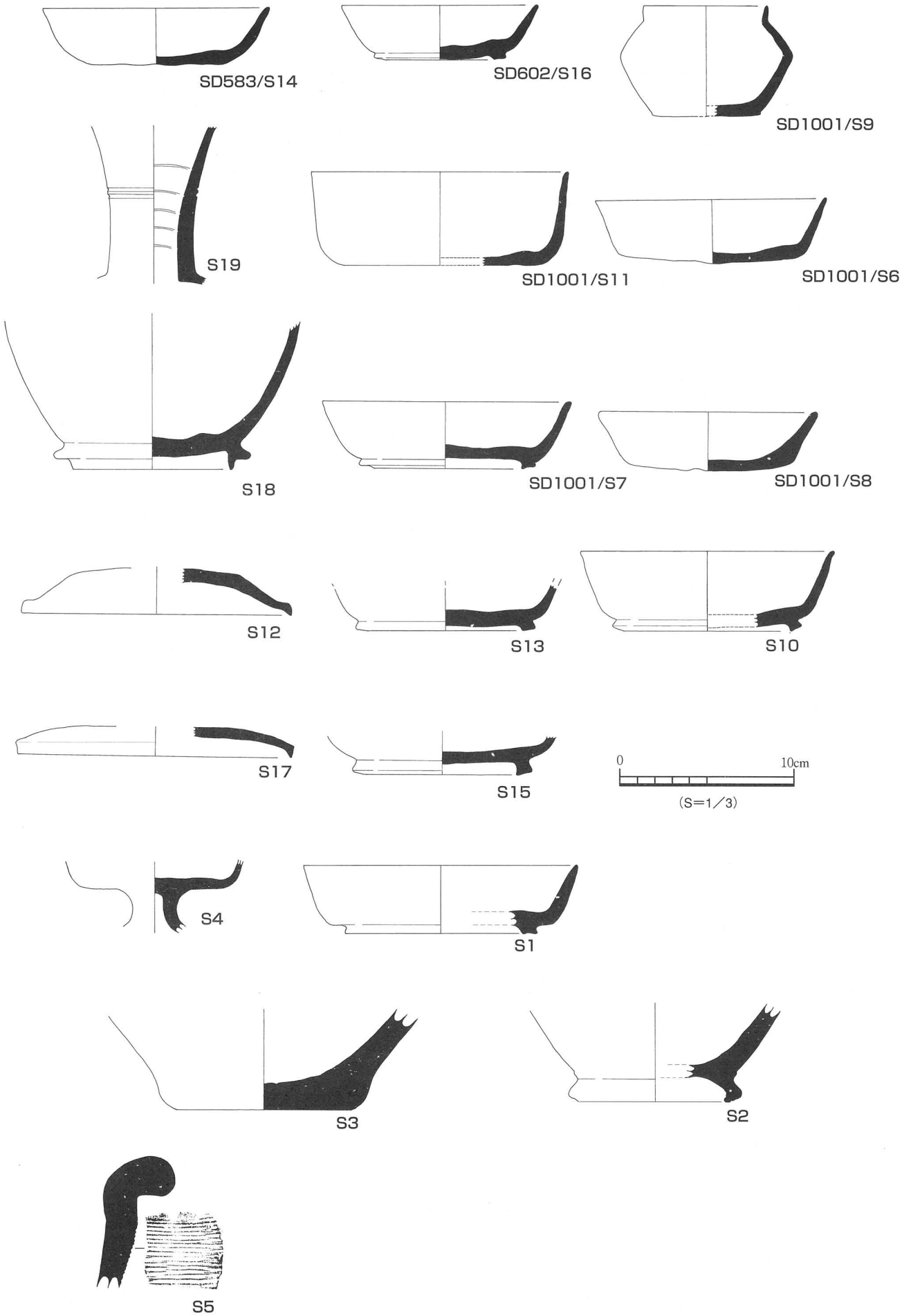
図版２　出土遺物実測図（弥生時代２）



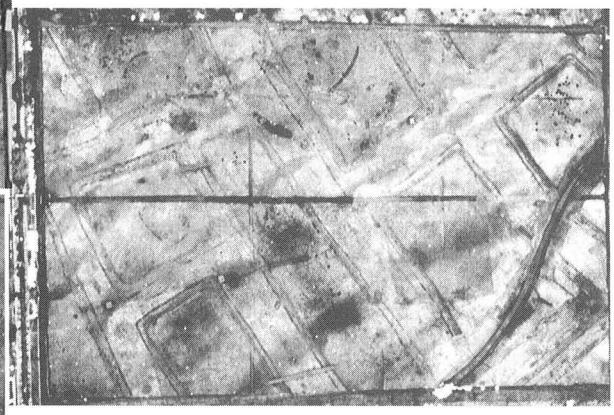
図版３　出土遺物実測図（弥生時代３）



図版４　出土遺物実測図（弥生時代４）

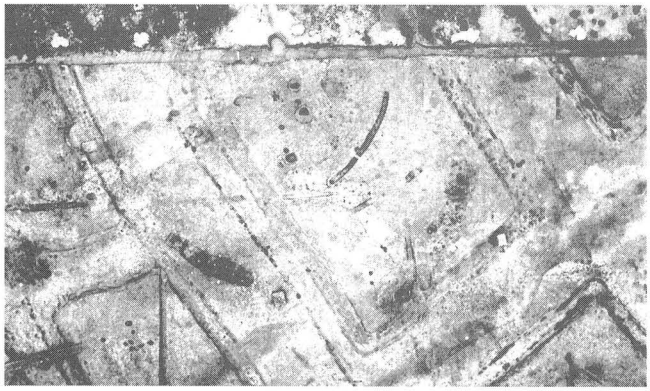


図版５　出土遺物実測図（奈良・平安時代）



調査区垂直写真（S＝1／600）

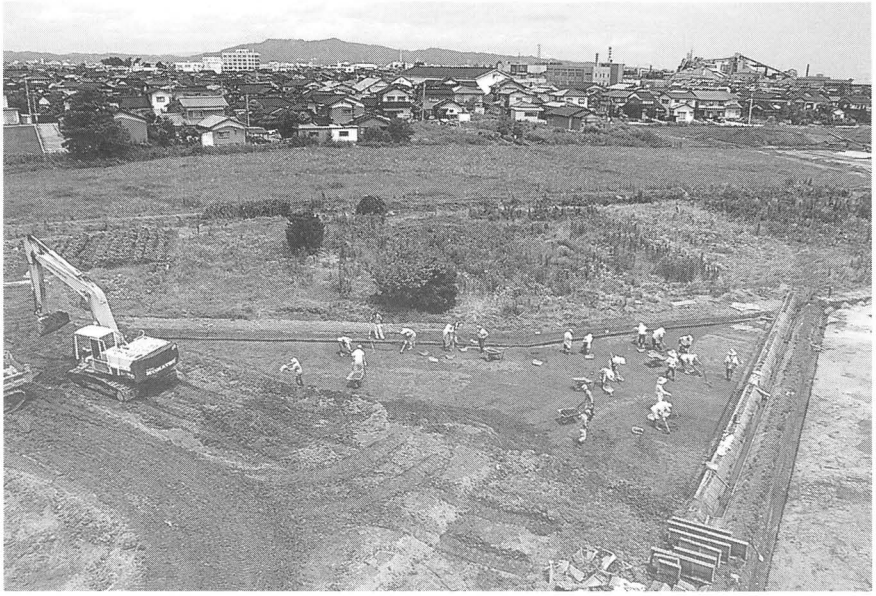
調査区近景（南西から）



第３トレンチ10T～U区遺構群

写真図版１　遺構写真

作業風景



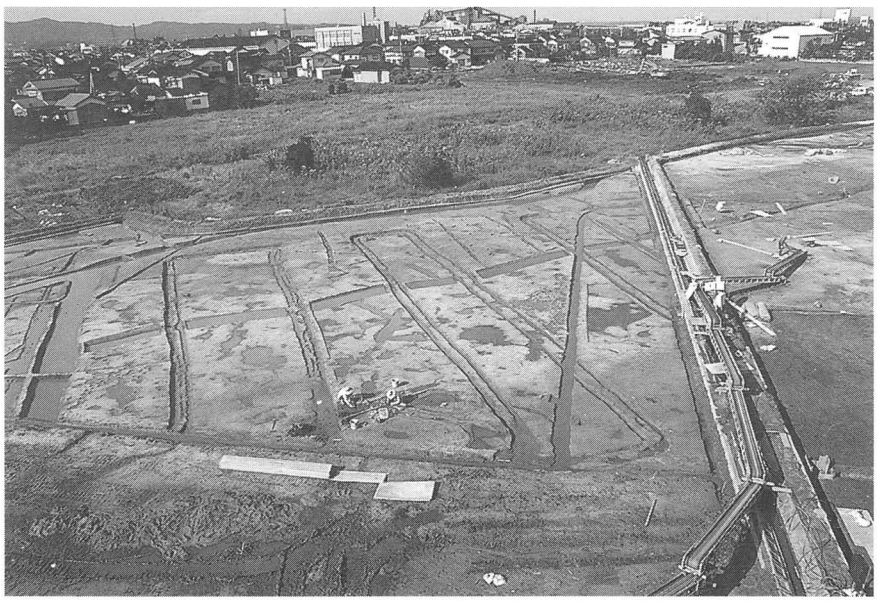
作業風景

作業風景

写真図版 2

SD610

SD405・450

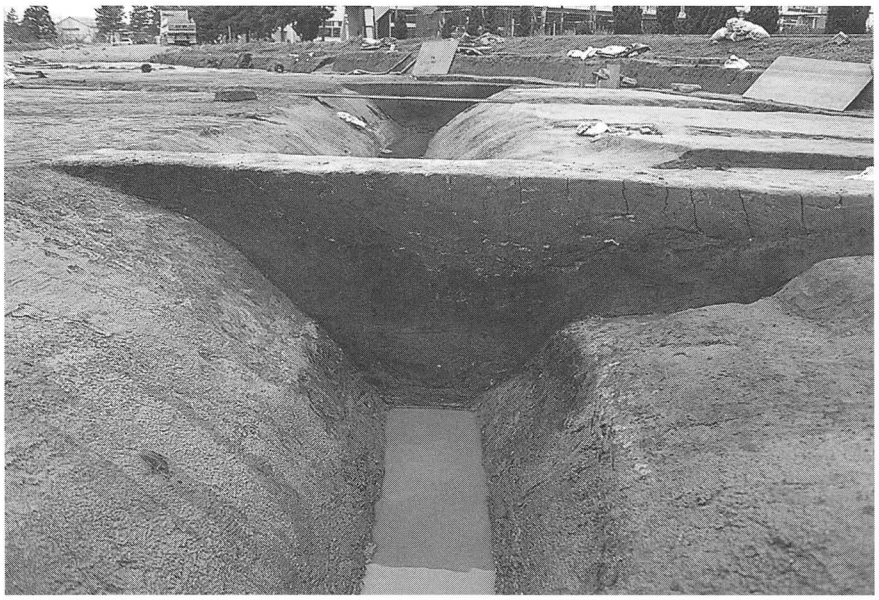


方形区画遺構

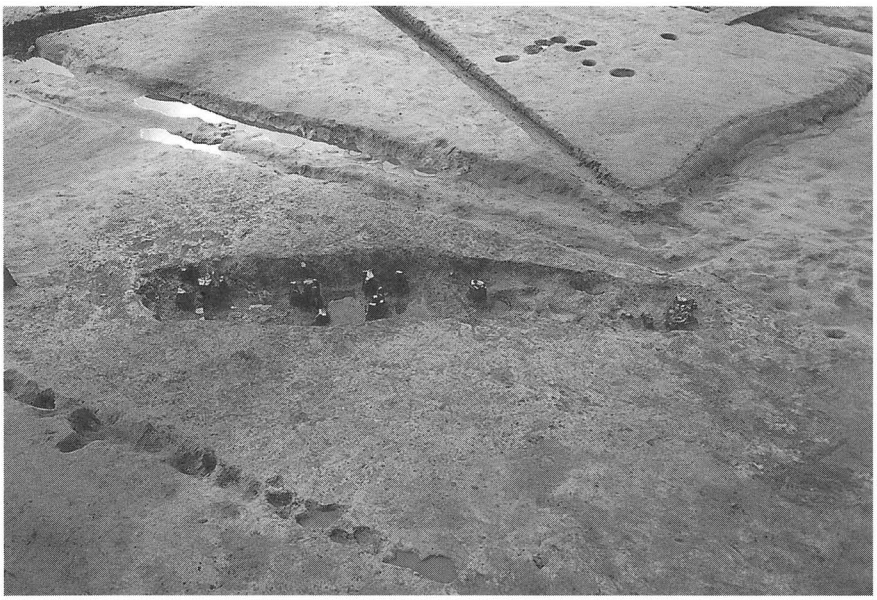
写真図版 3

SP607

SD1001層序



SD631



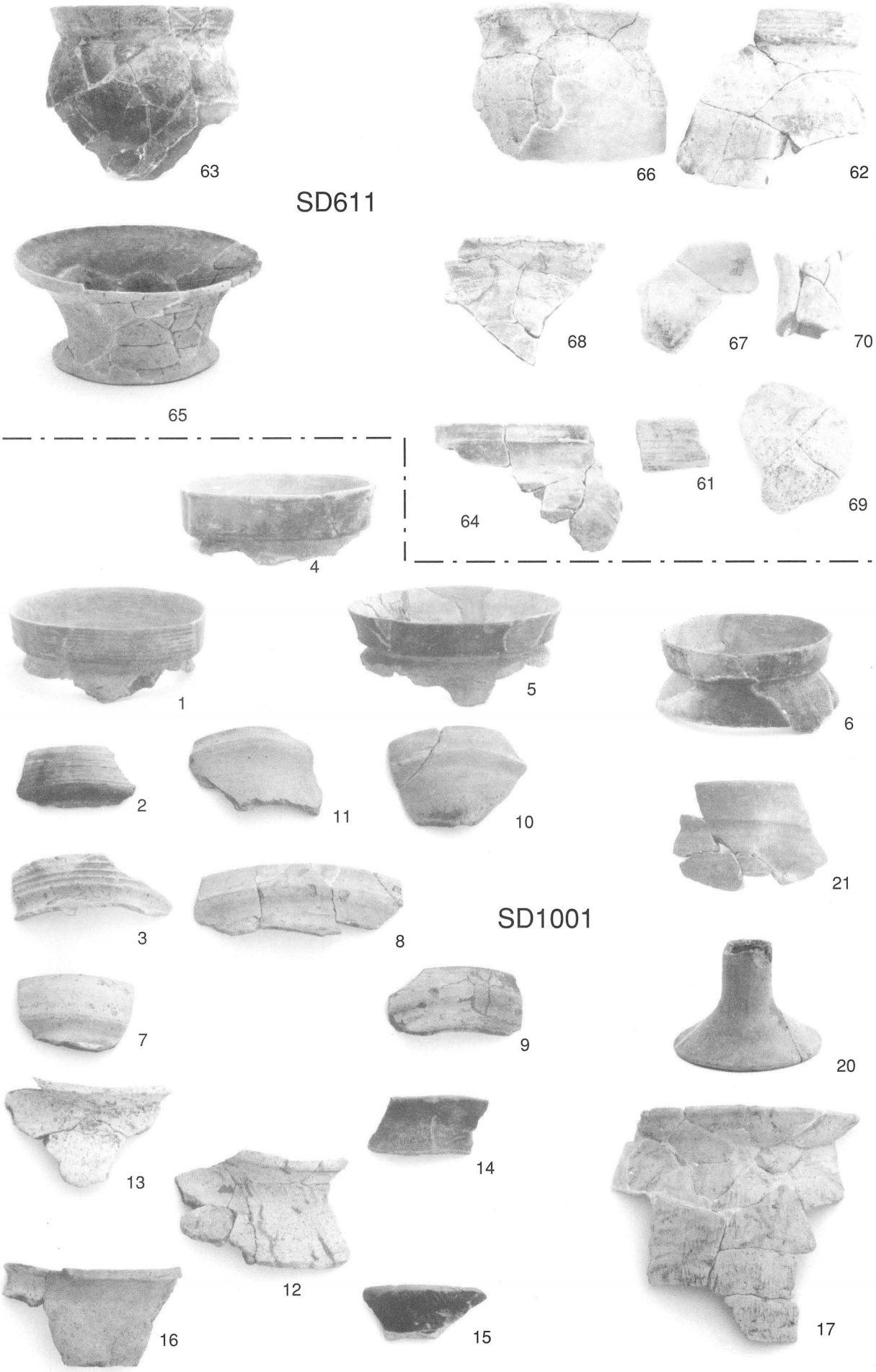
写真図版 4

SD583遺物出土状況

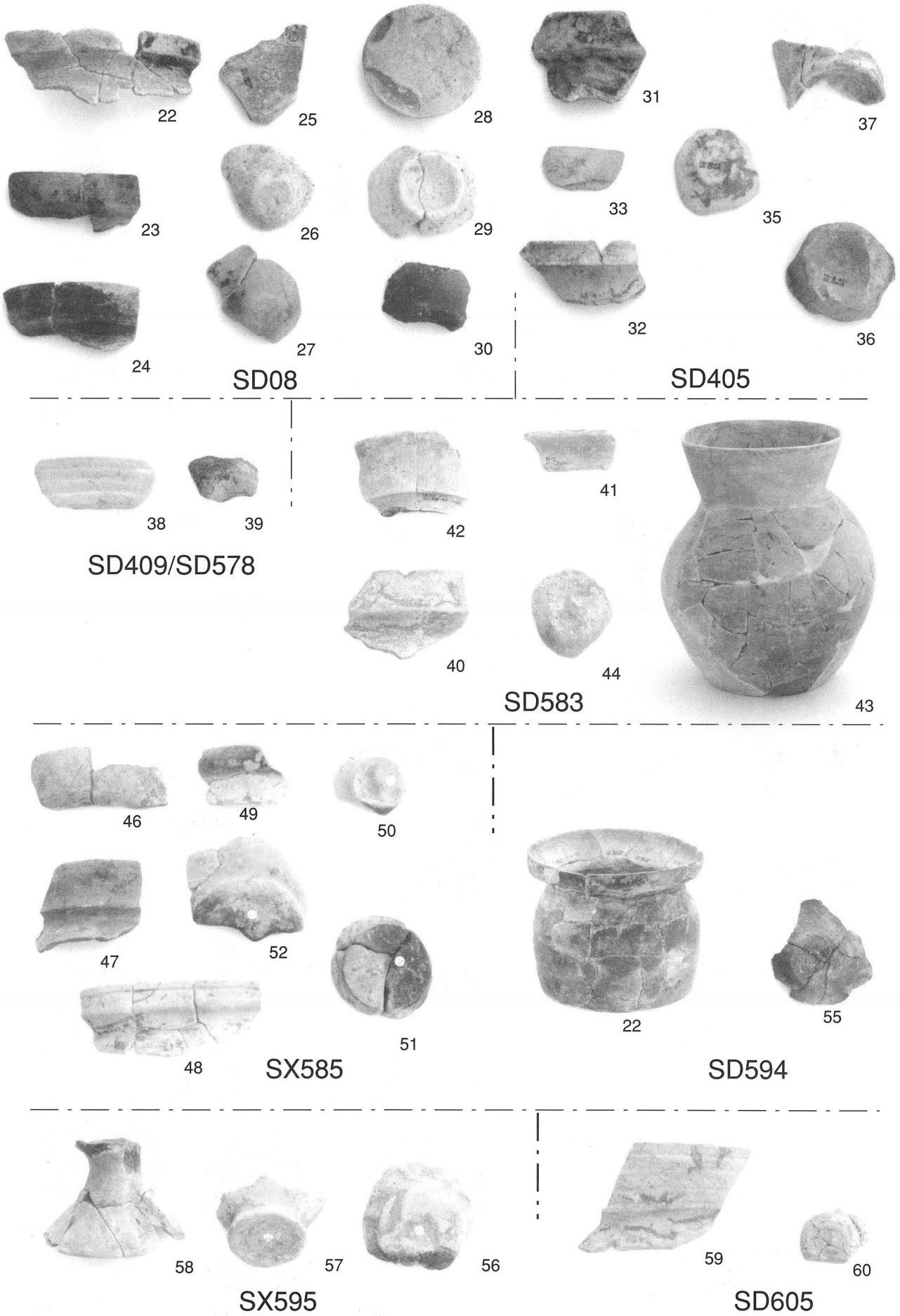
SX585遺物出土状況

SK625遺物出土状況

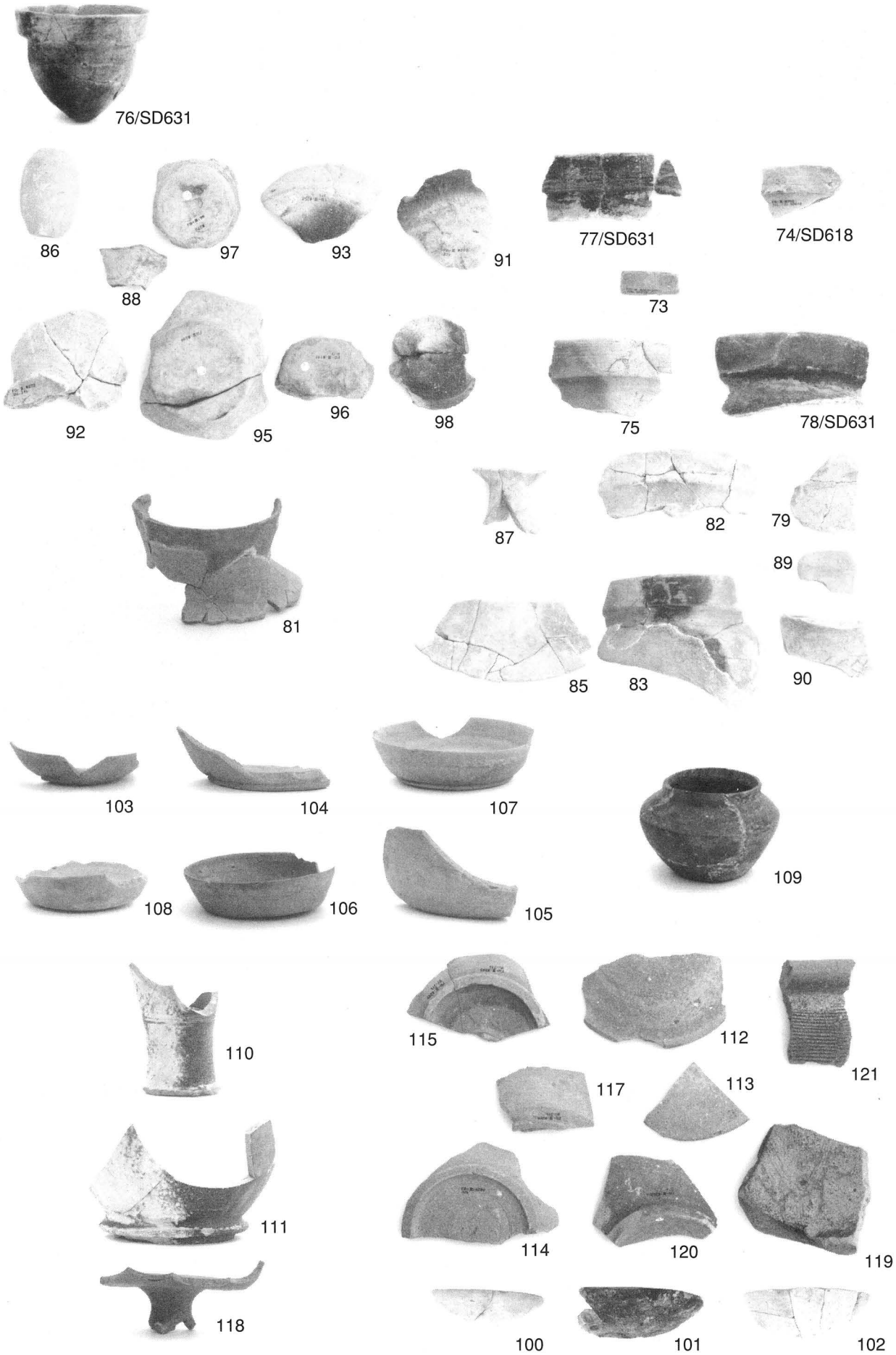
写真図版 5



写真図版６　出土遺物写真（１）



写真図版７　出土遺物写真（２）



写真図版８　出土遺物写真（３）

報告書抄録

ふりがな	とやまけんだいもんまち　ふたくちあぶらめんいせきだいさんじえーちくはっくつちょうさがいほう　ふたくちとちくかくせいりじぎょうにかかるちょうさ
書名	富山県大門町　二口油免遺跡第Ⅲ次A地区発掘調査概報　—二口土地区画整理事業に係る調査—
シリーズ名	大門町埋蔵文化財調査報告
シリーズ番号	20
編集者名	尾野寺克実・中井英策
編集機関	大門町教育委員会
所在地	〒939-0294　富山県射水郡大門町二口1081　TEL0766-52-6964
発行年月日	1999年3月

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯 °　′　″	東経 °　′　″	調査期間	調査原因
		市町村名	遺跡番号				
ふたくちあぶらめん 二口油免	だいもんまちふたくち 大門町二口	163821	382048	36°43′21″	137°03′29″	19980601 ～ 19981218	大門町二口土地区画整理事業に伴う調査

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
二口油免	集落	弥生・奈良・平安	溝・土坑・穴	弥生土器・須恵器・土師質土器	

大門町埋蔵文化財調査報告　第20集

二口油免遺跡第Ⅲ次A地区発掘調査概報

二口土地区画整理事業に係る調査

発行日　平成11年3月

発　行　大門町教育委員会

編　集　大門町教育委員会

印　刷　㈱立業社高岡